まゝ花の梅

下編

へ13
2919
6

門へ13
2919
6

昭和九年七月六日
購求

春色籬の梅巻之六

江戸　爲永春水著

第十一回

勤め十ゝ身の侭ならで濡れぬ時やうぐひす鳥雅のなごりを見そめしより眼くばりつゝ恋ぶるわが病ひ春河内の施雪の金ぐわのゝ丹減の男ぶり知らぬ時節なりけんうぐひす壽樂と逢ひ〳〵より雪の緑世鳥雅の好（頼ぶとゝ）ぐも昔ゆらるゝ尽なく緑糸の恋やつけ是　鳥雅や壽樂まん　お春　今

だんしゃ小藤が唄女ゐ再勤こうりゃくこが寿へ三年ご出ハ
成ませんが三島さんとう名号女中と相方ゐ為て見張
も和哥町を勤こりゐ座敷で見世屋ト三ごうり小
藤と三島が梅里の異見を不風婦多川へ家戒借う
夜ごをくハしく咄候 鳥へイヤそれハつまらぬひまご者ー左
様のふおりゐきごを家内へ帰ってもいと彼男へまどつぶとも
冥といふまけご 寿へ左様サ久うてまた方がおあきさんのおゐよう
あんごきうませうゐ ゆくいうしても落雲さんの所ハ手廻

でもお出ごきう十八ゐう まゐ まひトキニ私ハ手宿へ帰りまして
忠さんと安蔵さを中ても又真ゐ参りませう 鳥へ左様ゐ申まう
そうまでハおきうくさのう 寿へ仕方の代ゐゐ晩かどとうまして
元人さんとお見ゐうて参りゐ地まゐ参りませうアイヤド
帰りゐ 千鶴へお花おまも帰りまりーゐバ鳥雅ハ人ゐ家
て忠こと寿楽ゐ来りーゐを言聞せけるバこまゐ大きま
腹ぶりくいゐ私ハ忠こと宿ゐ一所へ定ひゐ行かとうて
彼男と賑ハしくゐりー 家を盛貝ハ鳥雅一人軍歌の席へ

物見遊山を立出、書楽に国風雲の文、尋ぬ
ていうる時、島雅の心、晴れ〻て、小演といふ
浦風といひ、おもひのうるまで、仏道も舎衛の国、縁あって
三人とも捨てこの程の、姿はおしもなし、三女ともなるべきは
うへなども、実意武島雅小尽すう、三人の勝り劣りは
ざまざまの、文を取、島雅も、あまた、戒、便のあるべきなり
けるとなるべしも、浮雲の、西乃ひあらねば、着宮よろしく、寄せて
請うしうあることなるまさて、浦風の、詳しくは、父、三郎、の和

歌のうるうるなら、今見は例より、大きに顔を、紅梅ごの、一戸
今見は、昨日よりもまさる、風情ごなる、浦風を、ごなる、松一人
留守して居ましたらば、嵯さんも、一軍法でも、関は、あるる
きのうち、左様なる、ものや、今のうち、席へでも、行て、抱んて
来れば、嵯は、備さ、絵入本でし、視て、居るそして、老父、裏
人、温泉へ、遠入、ヨトの、ものなら、軍法、席へ、行く
後は、一人、浦風、ものなる、賞和、二品、二品、被、とる
えへして、漢中、ものなる、角、我身、浦風、しるの、義、の、秘

歌謡のようなものとすれば、どこかにぬけるような方の御思召、御変化、その身にしまる切なる為の人情が冊子にあるもあるべしと、世間の人情を穿ち、島雅様が見限り、出でるひと伸の町でも笑いのさいせんと、極きわまりなき事を反古にして、何のるもなく勤めて呑みイ、あさのを皮ものみして、約束をちがもせず、達引を知らぬ意地も、あれ女ごと復を立て成さうとの八幡でもありイ、さまざまの島雅様の思召しとは、さきうイしと、赤ちゃんが恨みさんが恨くうきうイしと、赤ちゃんが恨みさんが恨くの吳員をして、吳うあるーてらんさんの赤もうーー島雅様のあくまもある意ごと

うちうあでもあらんが如動をして居き人すれば島雅さんの方ハ、清合で仇報をするふるらんとも猫の切るる様ハ仕るひらう無もちぐけてあらんーー異乗遷て赤くきやるふまるんと老人の、ぬく清合て吳くぬまーーと赤のうるをすたーの中でも如動ーーと、のが悔しふさるを仇報ーーとも家早異張で島雅さんとあハ是、あひうるうるうるバ父さんへハあ孝まるりイすう何年早く命成、うてお吳ものーー新メ様記お相陣さるも私の父ハよく勤て、年ものみせうのーー代おーー著てあるー頃ものも男ハ歌ハ主てその

春の梅
秋の尾花
四季とくやみ
ふぎりのきく
人の山りこ

男に抱つきて死なんとするのも、宗和でハなく、この和歌に感
じ入ぬるゆゑ傷ハ関人あらざるを、くいを長くくさ独言陽子の
隠れて泣伏せバ庭の方にて男の怒り男、左様いふ和と知らぬ人
うち竟そを限りハあて居ぐ今更仇報も乳のまゝで顔ゞ合
らぬ是ゆゑ語るしを、皆ヘヨヤ鳥雅さんの方へ行て門く
陸子ハ長浅ちけーら仇付て氣味悪るく、落ア情ハ鳥雅さんが
仇所へ仇報して来ゆゑ、かのゝ奥の方へ立んとする間も
あらせず袖をとり陸子を明け　鳥ヘあゝ、さそ私が陸子
らう子ト去ぐうハ言ハなて氣を強め鳥雅の顔を見ると義理
ものゝ方をきき人ゆゑ　皆ヘヨヤ実正の鳥雅さんてあり
仇報して来ても異るさいきく報やゆ　義理見る
のぐゆゑ陸子エト　ひあらう鳥雅の様ハすぐと対き涙の手
ちらりく　ありうりあてようらう　やち家の奥の上座先ハ皆て
後で鳥雅の身の上座ハ　皆ヘ　悪さやう男安さ出ぎ
やく　あらく　ものゝ言ハとなく　表れ
鳥ヘさそあやしと男ハ　恥月書楽の　を

義で来ようと思ってけれども債切と身義は尚早者の人
うるぢまりくるくるくるくるくるんざがやうく今尋ねて来たのさ
が斬りして来ても遠くあひうく 商 くるるに旅人も遠
勇まる入ハ居ないせんヨハ父ぎんと私だろうざあの居ない義え
き今月ハ軍疲を聞よ仕ぬ連てあさ耳の
遠い都まだうざあ居ヨハ代ハ人多きるか祝しく
今月ハ祈でお用ふくらいまる祝えありまくらえ祝人の祝
ありまもまぐ義の祝ハ思ハまて覚あけまハ祝と気ぢめて

ありあせんがドレ平 祝身をお着せあさひまりト鳥雅の身を
清とうち守ることるあぢけあさ 吹の用のとも寄らく 鳥左
祝ハまるを 山男もまさ義でハあひうを 祝ぢハ祝ハ祝ぢ空山
あ吉ありうハ 壽楽ぢお 祝ハ出合さのも 神ハ侍のおハ合ぎ
らハ祝今ぎ平沙汰ハまるさの人 湯殿ハヨト 西雲の
脊中をさすりそいさハまぢさも 嬉ハげ水 焼ハ雲ハ鳥雅ハ
別まて後のる実の父ハ ぢう逢ハまでをくるくる 沼まぢ
鳥雅も平前尾ハて京都へ出せらまハうやく仕帰

勘当の流言叶ひて別宅をもう一病気よりして此湯治場へまゐり一由を聞きとも母親影の女連を同伴せ一旅ホ言ふ一おの死女房ホ持一こちハさびしゲホ満雪ホ去ぐこけれバ陰ヒのハビ相よ一ふをるぐさめけまバ女房のこちゃるくも表こぐれこる頭の糸のうこく結んでホ一けまハ放まもあるバ身紙よりせて満アノウそまぐちゃア伯母様私の父郎ぎんホ紀已ホ乗りて直ホ女房ホ貰ふとい人変を言ふ迄で呉ふ多一ナト多様一いふまてびうこう一鳥ヘそ伯様一てき様みさ一

分ことが言ふまるものこ子今のお家の世一ぞハ伯父様私児ら美沢ものこと申して大叔の金成物一て身紙清廉一こ親伯へ別一て様こ一く女房ホお呉ふせへうんぞといハまるこのの子満ヘヨヤこぞざるハ私の父郎ぎんハ壮年こ三放蕩をして其こんぐらこ私る野暮みこを言ハハ他ふ人ヨ思ハ私ら御様こんの変を頼母一い方ぐらこ豊乗女房ホのこ美人とうち明てたうて有まハ八子鳥ヘそぞこいこそ伯様も五貫ホ左様いふまるものでもひうこ様みこをハ生ア

おるふ古くへ浮くてのたゝふ世ぶへ紀ぎまんぶやア多ひゝ
為へヨやそまぶりやア宝若へ彩ゝて辱ねてへ来て居ゝ旅ぎまゝても
内紀へ宝早 私ふ兎相ゞ尽ゝて居ゝ多ぶ子 鳥へ十二ぎゝゝ
ゝゝぶ寿楽ゝ関ゝゝゝといゝても直ゝ辻ふへ逢ふゝ多へ仕ゝ
ひゝ子 為へイゝ兎相ゞ尽ゝので在ゝゝやゝゝけゝぶ直内宝
さんゞ出来ゝゝのふ遠ひゝのでゞゝ左様ゝへ知ゞふ
氣毒ゝゝのお関ふゝゝゝまゝへまれぶ生涯のお内宝さんゞゝ
ゝる様ゝ男ゝて私の 祖ぎんゝゝまでゝゝゝゝゝゝ直内

ゝ様ゝゝゝゝへ鳥へ孫ゝ送ゝゝゝ若ぶゝ
ゝゝゝゝ思事をゝて猶ゝふ新迷惑ゝて遂ゝゝまれお死ゞ
ゝゝぶゝゝゝゝふ包まゞゝゝ河て眠ゝゝ清後ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝんゝゝゝゝけゝゝゝ鳥へ大様ゝへゝて言ゝ第の毒
ゞゞ実へ別家ゝて舅ゝゝゝゝふ付ゝ親達ゝ見ゝて
ゝ舅ゝふ引我女房ゝへ様ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
面白くゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふ女ゞゝるけゝゝゝ為へ入ゝゝゝ為ゝ

まるく男ひ女さんなヨヨコレサまさ泣のう復ぐるも せう
けまど実正に詮方なしゆ哭川と女房ぐるう顔てどうてる
なるハナ。ノノコレサよく吹解て呉るとのふホ居ろ 哭川 哭
あくお別とやこと私の舅の上謀又魅しい勤をしとアのに
世君の仕本妻さんと成ふるんそと男川て居ろハあるねぎ
まに そまぐうとやて今更又お内室さんが出来しぐうバ
私ハ男に切川て仕ひまにとあきくめら主る根るひる
らバ半君のあるゆも宜ざるせうが何根してぐ縁を切らまる

の人居ざるに邪ナ女ぐをお男ひで社に産ませうう今又
うけて此月日をお暮ひやイしゆ根を出て今ア為ぐそふ
なと推量して おお兵衛ト上ずる長五けふかるく以
まそ鳥雅ハ客の手数といふハ常体 そのそぐめハ浅ぐなふ
親達ても勤番うけて不自由の身とありし年も上方ホ
あるつ、ゴ手ずに恨と情ぐうホ帰りしぐ年に早くお義の
吟成不関再命世に八浦ぐ雲が出勤してる者ぐ今して再
度通ひもするるうんを竟解ひのひうう乃捨て逢ずホ

多せし支度今宵の中幾つけるも母さしく出さる言
の葉のみ蔭き姿となりかりたるうし契りの膝よりさきを
繰返しける胸の中かの人義理も中浪のるのすゑまで
再度濡まさる涙の袖をかうしきて名しぶりの落雪
か涙の笑顔兼言八千代も尽ぬ楽しくあるし
○新て後忠と思ふの風情襟くあるべきを勝して書
きがたまゝ何ほも四五日逗留して看病の連も落
雲の方もおのし家路に帰り行にとこハなりね

第十二回

松が枝に憂きを重ねし墨衣濡染の姿にうつゝて今日
ハ花美なる衣裳袈裟の好き小演子鳥の名前を緒
縁とせし其儘に吉妓と新康の評判もたかく通ひくる座敷の
数と流れ行かして一日も透なき開きあるりに
ほがかる内良風の筏付て息子ある彼機川両家の雨舎
の源喜が機嫌を聞に繁く至るうし　尚寺の方へ出浪ハ
先から去髪と刑除　よのかく中本実方屋の女房ありあり梅里の女房と混じ
手島をつれて

樫ぬき行ひ日ぐ慶次郎殿ハ居まぶ大善寺ぐ
入ろう寺ろう伝ま雑清ぐの脱物を兼ろ兼さ
せろ内所の苦労ハとも角もまづ徒見ぐ人親常の笑
女樫ひとのゝ男ろれ　ゑ〳〵出演さん此ろ
お浮の新興ハ宮ホ西白ひとろの寺さわ人祈角ぐ戦涙
やろをいろて樫ぬぐ　おもどのホ弾で　おもせと人のゝ素人
おろぐて乱りきろ　ゑひ樫ぐけ見ぐも迷ぐろり唱ぐて
イエ蓋ぐ人ハ〳〵ナケニ初ろう面白くハ白ひそてあの鋼ぐ子

本来ハ私ガ作てるのおもゝ白ひョ山島さんガお座ま
おまの時ろ山陰居ぐガ知ぐ知ぐさぐふおろ〳〵ぐ経て
その時分ハ殿〳〵ホ異見で　ぐ〳〵社会ぐ琴のお師匠さん
で香登刺さんとい人のガ一流傍の曲第成分さのぐ毎
ごまごけまごもも鳥さんもまごホ流傍の曲第もうろ
曼ぐごと御言ぐろう私ガ待好藏ホろ〳〵人さのぐろう伝報
も多揺ガろるぐて引るぐ人ョ　〳〵ホ土蔵で白ハョ単炭
きんぐの和十さんぐガ聞さ

褒らるゝと嬉しいが 小濱「ヲホヽヽ嘘をお言ねへナ十二文天文でも
褒られる程な三味線ならいゝが栄さんや和十さんハ実に
他人を嬉しがらせるのが上手だから気がつくハずの道理で
久しく引込んで居てまたひよいと出さのだからなかの中の
様子も今の流行が違つて居るからおぼへしてお客の
機嫌も取にくいハ 鳥へ「イヤそれでも小濱さんハ元来人は
知つて居る中にあるから左様でもないが私ハ生得の癖でもあり
のだからいかぬ旨を知つて居るので夜分が嫌ひで始末であり

生得ハ 鳥「ヲヤヽ大そふ卑下して御言だねへ小濱さんハ
元来のおやの芸の評判が鈍な耳と目をもつた人でも今に
和奇町一番の嗅女ありおさまりだらうといふ人が皆さ
ナニアノ美縹容儀でもあるし永く出て居やうとも今に
しくお客が付て折角他女の逃げる中も方々とり金持
引込んで仕舞ハまるだらうと相模屋の喜さんなんぞが
あの戯苦労ハ嘗へてお出でハ 小「なんとも御熊さん
今度私が彼れらを評判のうくのハ此様のおかげであろ

まつ[illegible]ヨ　[illegible]て[illegible]も古稿ごけ[illegible]ども相[illegible]ごけ
[illegible]真さんも[illegible]のごろう西方ら相樹ごハ[illegible]
[illegible]ごろう今[illegible]新[illegible]て[illegible]
[illegible]小へヨ[illegible]ト言[illegible]ごう側[illegible]
[illegible]線を膝[illegible]載せ潮[illegible]合せて中[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]き[illegible]の[illegible]
[illegible]ら[illegible]ど[illegible]の[illegible]ハ[illegible]者の[illegible]に[illegible]ごう[illegible]今[illegible]
[illegible]て[illegible]ると[illegible]清元喜代[illegible]と若竹のお[illegible]賀の

二人[illegible]限[illegible]ごその代成[illegible]て弾[illegible]べ

○　○

〃　宝咲ハ只いろの濃宝き日を春を数して
咲せることぞ。花のあろの直ぐて咲くハ[illegible]き
姿ハ[illegible]香物[illegible]も深き雪の宝ひ[illegible]や
梅の花の兄

〃　抑ハ優[illegible]撫の化粧　桃の眉あるみさやるる
笑顔もものもてひそ[illegible]と同[illegible]梅ハ花も

ゆうしき

なるべく完ふ品のいく丈夫なる人をして三味線の長唄
踊りどころの面白く付てあるまゝ〳〵おづう
ムリて多度ハ貴人ら是を自ヒョ乃ち出ちつゝうら元人う
賞ちうと思ひまし〳〵 小ハナアニ行程しで節を知て
曲第成正然ちうきまさ人ゝ国まうと是度契ハれる
曲があるふ度ひ自ひうう是でもひやく〳〵して怖〳〵浮き
まひハ なるハナアニ雑が島のうち人があるまれるものうト

まるの所人格よの戸をあけて へハイ 出免成まし 歳
さんハけ方ふお在成まひうトのハ小演が方の婦女
ちうり ハイヨ お名うり雑ぞ家内へ来さのう人 ハイたう
お島さんゝお逢ちうと度と芝仲板みこうてぎるまひ
ト図てこの島ハ小演と頼を乃合せて アノウ 行程る
人が来さのぞ ハイ十八九ぢうりの完ふモウく行とも
中程のあい義男の若旦那らのお方で成宝生まひ
トいへば小演ハ完ふ義 へお島さん 絹がドキく

すぐごらうず　よゝヲホ〳〵イヱヱナニ左様ぢやア　あります　せんハ
小ゝアレサ　ぜひ　ぢでハ左様お言ひ　でも　今ハ　忠さんの顔を
お見ぐを　直ハ　ばつぢ〳〵　とゐりてお仕舞ごゝろ　ようく
獲をメてお出ヨ　あまりすぐでハ　我慢を　強成のごとく　振て
居る　女ハ　仏様　あく　分ハ　しても　冥と　視ぐ　ばらきゐる
振イ　上ゝ　お長ヨ　よゝヲヤ　お鳥さんの　情人ぐ　すぐめて　氏
ち地へ　お出の　よゝイヱヨ　ヲホ〳〵　小ゝアレサ　まを　振イ　うん
ぐりて　笑ひて　ぢうり　お左ぢやア　ぜひ　ヨ　実ヲ　ヱ今日　忠

さんハ　お逢の　ハ　大ゐの　変ごと　ぢう　怪〳〵　社成で　ハ　ゐう
ゐひハ　よゝアナニ　大丈夫ハ　事をメて　居ゐヨ　よゝヲホ〳〵
産でも　する　人の　様ぐ　ぢね　小ゝイヱ　実ヱ　ハ　穏〳〵　と　むづう
ちへ　入　俗ぐ　理を　後ド　ゐひ　けまぐ　ゐう　ゐひの　ごとく　順程
無法を　考へて　お出ヨ　よゝアく　左様　ぢ　生ゐ　ヨト　立あぐり
ゐぐ　まと　産ハ　美き　よゝマア　今　仕て　忠さん　ハ　ゐと　挨拶を
ちごらば　頂ゐ　ゐう　小ゝソレ　面　覧ゐ　子　自分の　情人　とい
ぢ　ちゐを　ちるのを　様ゐ　聞て　ぜひ　様ゐ　こつて　いけるゐの子

まア子供てお逢なるハ変して根くらしの男ぶりを言ハ
多いそうゝ只多ゝらしい心持をあらわすハ言ハて子おもゝれ
機嫌よくして直ぐ帰ハ嬉しそうにひさゝ
ぶりをさゝやいでも仕て程ひ度といふ仕持ようの理ふ
あるゝ会ゝ決てお主なる時多を考へて私が帰りて行うふ
そのぎ
そ者でまゝ不及なるゝ後ほのことを紙摘梅ゝ後ド
付てよゝるハふ 多へ不ゝゝ お島さんが付度なさゝの気ぐ
おまぶゝゝ小演さんが後舞ゝゝ お外でゝの中ゝ お多

ぶんのお言の通りの義双男なるハ お島さんゝ厭ふ物て
お主らしゝゝゝ読ト付ゝゝ そをぶされ人ハ ゝへてくるくするを
主様さらゝとおりひ生ひハ 手アレサ 彩ゝ行程ひくち
なるでも小演さんゝ仕迷れゝゝ 陰分 笑なく
気を付てのの仕言生ひヨト 笑ひなるゝ出て行

春色籬の梅巻之六了

此後鳥雅八小淡萬雲お紀の一之女お種を
尽さまいづまも捨ぐてきた人情の極貧例もあるに
青鼠お蓑〜うぐず弥ゝ色情をたゝるまて丹誠を
つゝ紙教刻ともあるべきすどをあるものづゝ番宿お
淡を信さ〜ぬ〜

江戸

狂訓亭主人作
門人 春江校合
歌川國直画